

『資本制生産に先行する諸形態について』(二)

井 上 周 八

三 資本制生産に先行する所有の三つの形態

について

(一) 『ドイツ・イデオロギー』における所有の三形態

人間社会の歴史的発展、とくに先資本制社会の所有形態についてのマルクスとエンゲルスの見解をみるばあい、第一にあげなければならないのは、『ドイツ・イデオロギー』Die Deutsche Ideologie<sup>(8)</sup>である。

(8) 周知のように、この膨大な草稿は、一八四五年から四六年にかけて、マルクスならびにエンゲルスが執筆したものである。科学的共産主義の形成期、マルクス主義の哲学的、理論的基礎の確立期に発表された、重要なこの著作の意義については、すでに多くの解説がなされているが、それらによると、この著作の意義は次の諸点にある。

『資本制生産に先行する諸形態』について

マルクス・エンゲルスが、彼らの新世界観をつくりあげてゆくばあいの批判の対象となったものは、ヘーゲルの客観的観念論とヘーゲル新派の主観的観念論であった。そのさいかれらはフョイエルバッハの唯物論を高く評価すると同時に、かれの唯物論の限界をはつきりと指摘し、唯物論と弁証法が本来不可分一体のものである——唯物的なものは、弁証法的であり、弁証法的なものは唯物的である——という質的に新しい弁証法的唯物論の基礎を確立した。とくに、それまでのあらゆる唯物論の主要欠陥は、「対象・現実・感性がただ客体の、または観照の形式のもとのみとらえられ、感性的人間的な活動、実践としてとらえられないことである」という見地から、人間を抽象的に、非歴史的に考察したフョイエルバッハをのりこえ、マルクスは人間の本質が「社会関係の総体」であるとして、唯物論を人間社会の領域にまで適用しなければならないことを確認したのである。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』は人間の社会的存在が彼らの社会的意識を規定するというテーゼを明らかに

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

一〇

したのである。

マルクスとエンゲルスの生存中、『ドイツ・イデオロギー』は、そのほんの一部が公刊されただけであつたが、やと一九二四年にいたつて、ソヴェートのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所長のリャザーノフ Рызанов の手によつて編纂された『マルクス・エンゲルス文書』 Архив Маркса и Энгельса (ドイツ版 Marx-Engels-Archiv は一九二六年出版)で、その第一巻第一章の『フイエルバッハ論——唯物論のおよび観念論の見解の対立』 Feuerbach — Gegenatz von materialistischer und idealistischer Anschauung として収録され、一九三二年、リャザーノフに代つて所長となつたエムラッキー Эмракий によつて、『マルクス・エンゲルス全集』 Маркс и Энгельс, Сочинения (ドイツ版 Marx und Engels Gesamtausgabe (MEGA)) が編纂されるにあつた。『ドイツ・イデオロギー』として、その全内容が明らかにされ、一九三三年にロシヤ語で公刊されたものである。

マルクス・エンゲルスは『フイエルバッハ論』における先資本制社会についてのかれらの見解をのべるに先立つて、まず以下の点を強調している。

人間がその生活の手段を生産する様式は、何よりもまず現存する実際の生活手段——その手段を入はまた再生産しなければならぬ——の性質によつてきまる。この生産様式は、個人の肉体的な実存を再生産することだけではなく、むしろそれは、そうした個人の一定した行動形式、その生活を表現する一定の形式、個人における一定の生活様式をつくりだすものである。

どんな生き方をするかで、その人が何であるかがきまる。したがつて、個人のあり方はその生産と一致し、何を、どのようにに生産するかに一致する。個人の性質は、このようにして、物質的生産条件に左右される。つまり人間の本質とは各個人のおかれている社会関係の総体にほかならない。

個人のあり方を決定するところのこの生産は、人口の増加が起るときに始めてあらわれてくる。このことは、また人々の間に交通 Verkehr があることを前提とする。しかしこの交通のし方もまた生産によつて決定される。

いろいろな民族相互間の関係は、各民族がどこまでその生産力、分業および内部的交通を開発したかによつてきまる。このことは一般に認められている。しかし、ある民族と他のそれとの関係ばかりでなく、民族それじたいの全内部編制もまた、その生産および対内的対外的交通における発展段階に依存する。

ある民族の生産力がどこまで開発されたかは、分業の行なわれている程度によつていちばんよく判る。新しい生産力は、いづれもみな、それまでのある生産力の量的な拡大(たとえば、新しい土地の開墾)に止まる場合は別として、分業のいつその発展をもたらす。

民族内部の分業は、最初は農耕労働から工業労働および商業労働の分離を、ひいては都市と農村の分離とこの両者間の利益の衝突をひき起こす。さらに進むと工業労働から商業労働が分離する。同時にこれら各部門の内部に、分業の結果として、あ

れこれの労働に力を協せている個人の間にいろいろな区分が起る。これらの個々のグループの互いの配置は農耕、工業、商業のそれぞれの労働の営なみ方によって決定される（家長制、奴隸制、身分、階級）。同じ状態が（通交がいっそう進んだ場合）諸民族相互間の関係にも見られることとなる。

こうして分業の相異なる発達諸段階は、それにふさわしい所有の諸形態をとっている。Die verschiedene Entwicklungsstufen der Teilung der Arbeit sind ebensoviel verschiedene Formen des Eigentums. すなわち、分業の各段階がまた労働の材料、用具および生産物をめぐる個人相互間の関係を規定するのである。

さて、右のような、いわゆる史的唯物論の基礎的理論の一部を明らかにしたのち、この理論に立って、マルクスとエンゲルスは資本制以前の所有の諸形態をつぎの三つの形態に分類して説明している。

〔I〕第一の所有形態——種族的所有

〔II〕第二の所有形態——古代の共同体所有ならびに国家所有

〔III〕第三の所有形態——封建的ないし身分的所有

ところで、右の三形態は論理的関連をもつものであるのか。

また時間的継起関係をもつものであるのか。さらにまたその『資本制生産に先行する諸形態』で展開された「所有の本源的形態」の三つの形態と同じものであるのか、それともことなるものであるのか。両者の関係をどうみるべきなのか。ことなる

『資本制生産に先行する諸形態』について

としても、両者の間には一定の対応関係が存在するのか。これらの問題意識を前提にして、以下『ドイツ・イデオロギー』における所有の三形態についての考察に移ろう。

マルクスとエンゲルスは、分業の相異なる発展諸段階は、それぞれにふさわしい所有の諸形態をとる、として、先資本制社会における所有の諸形態を三つに分けて説明した。このばあい、青年マルクスとエンゲルスが立脚した基本的立場は、「生産力のある一定の発展に適合していた交通形態」が一定の段階で桎梏となり、「桎梏となった交通形態に代えるに一つの新しい交通形態」がもってこられるのであり、「われわれの見方によれば、歴史上のあらゆる衝突はその源を生産力と交通形態のあいだの矛盾のうちにもっている」という立場にほかならない。

一八八三年三月二日のカウツキー宛書簡でエンゲルスは次のようにのべている。

「共有の存するところでは、それが土地のそれであるにせよ、女子のそれであるにせよ、或いはその他の物のそれであるにせよ、必ずそれは原始的であり、動物界から受継がれたものです。その後の発展はすべてこの原始共有の漸次的崩壊にあるのであり、原始的個別所有から二次的に共有が發展したというような例は、いつ、いかなるところにも見出すことができませぬ」（岩波文庫版『エンゲルスのカウツキーへの手紙』七二ページ）。

共有から私有へという歴史的事実は、人間社会における所有形態発展の基本的方向を示すものであり、その歴史の出発点は「種族所有」である。マルクスとエンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』で、まず「第一の所有形態」として示したものは、「種族所有」であった。

〔I〕 第一の所有形態——種族所有<sup>(12)</sup> Stammeigentum

所有の最初の形態はマルクスとエンゲルスによれば種族所有(そのもの)である。それは、人間が主として狩猟、漁撈、また牧畜で、あるいはせいぜい *Hochstens* のという農耕で生計をたてているような、生産の未発達段階に対応している。ことに農耕の場合、大量の未開墾地を残している。分業の発達は、まことに微々たるもので、家族(大家族)内における自然的分業 *naturwüchsige Teilung der Arbeit* の拡大されたものにはすぎない。したがって種族内の社会的編制も家族(大家族)の拡大の域をいえず、家父長的な種族長 *patriarchalische Stammhäupter* のもとに、種族成員と奴隷とがいる。家族(大家族)のうちに潜在している奴隷制も、人口と欲望の増加につれ、また戦争ならびに交換・商業など対外的交通 *äusserer Verkehr* の拡大につれ、次第に発展して行く。つまり、マルクスとエンゲルスは、明瞭に、所有の最初の形態は種族所有であり、この「種族的共有は採取および牧畜段階の所有形態である」と考えていたのである。そして、農耕のことを語るばあいには、「せいぜい」*höchstens* ということばを付け加えていたのである。

なお、この「種族所有」の段階でも、すでに家族の内部に「奴隷」が現われているが、これは、人口と奴隷に対する需要の増大、および戦争と交易の拡大によって奴隷制として拡大し、奴隷は主として戦争によって外部からもたらされた捕虜が奴隷化されたものと解釈される。

(10) その後のマルクスの用語法によれば、ここでいう「分業の発展段階」を「生産力の発展段階」と読み、「所有の諸形態」を「生産関係の諸形態」または「経済的社会構成体の諸形態」と読みかえてみてもよいであろう。初期マルクスという「所有形態」ということは、包括的な意味をもたされていたのであって、ある社会における所有関係はその社会の生産関係の基本的性質を示すものであるがゆえに、その後の「生産関係」および「経済的社会構成体」という範疇へと発展したのであり、また生産手段の所有・非所有を軸として「階級」という概念が成立する点は、いうまでもないであろう。

このようにマルクスとエンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』ではまだ「生産関係」範疇を使用してはならず、また「所有形態」という用語も、内容的には単なる「所有」そのものの形態という意味にとどまって使用されていないのであるが、この点について、ソ連邦共産党中央委員会付属マルクスレーニン主義研究所の序文はさらに「交通形態」という用語にふれて次のようにのべている。

『ドイツ・イデオロギー』においてマルクスとエンゲルスは、人間の社会的存在が彼らの社会的意識を規定するという命題をたてて、その根拠を明らかにしている。彼らは人間の全社会生活における生産様式の決定的役割を示している。『ドイツ・イデオロギー』

において、生産力と生産関係との最も普遍的な客観的發展法則がはじめて特徴づけられている。この著作は経済的社会構成体というきわめて重要な概念をすでにふくんでいて、歴史的につぎつぎに現われる諸構成体の基本的な諸特性を簡潔に分析している。しかし、マルクスとエンゲルスによって仕上げられた理論の若干の基礎概念をあらわすために『ドイツ・イデオロギー』のなかでつかわれた用語は、その後彼ら自身によって、それらの新しい概念の内容をもっと正確にあらわす別の用語に取り換えられた。そんなわけで、『生産関係』の概念ここでは『交通様式』、『交通形態』、『交通関係』という用語であらわされ、『所有形態』という用語は事実上、経済的社会構成体の概念をふくんでいる（真下信一訳、『ドイツ・イデオロギー』国民文庫、一〇一―一ページ）。

では「生産様式」と「経済的社会構成体」という二つの範疇の關係はどのように理解すべきだろうか。

マンデルは「『生産様式』、すなわち『純粹な』したがって抽象的な経済学的モデルと、社会経済構成体、すなわちその内部で生産様式が主要な位置をしめる社会の具体的類型と、この両者を正確に區別したのはポーランドの社会学者ユリアン・ホッフフェルトである」とのべ、この理解に立つなら、「資本主義的生産様式は一六世紀以降、イギリスで發展したというのは正しいだろう。だが、資本主義的『社会経済構成体』としてイギリスを特徴づけるのは、一八世紀後半以降としなければ、正確ではないこととなる」（『カール・マルクス』一八九ページ、注50）という。

右の解釈は正しい。とするとマルクスは『資本論』冒頭で、「資本制的生産様式の支配的な諸社会の富は……」とのべているのは

『資本制生産に先行する諸形態』について

「資本主義的社會經濟構成体の富は……」ということにほかならない。また『経済学批判』の序言で「大づかみにいって、経済的社會構成体のあいつく諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的の諸生産様式をあげることができる」とのべているのは、「大づかみにいって、経済的社會構成体のあいつく諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョアの生産様式の支配的な社會をあげることができる」ということにほかならない。

(11) ロシア語版編纂部の注解を底本にしてつくられたドイツ語版編纂部の注解は「交通」という用語について次のようにのべている。

「『交通』(Verkehr)という用語は『ドイツ・イデオロギー』のなかでは非常に包括的な内容をもっている。この用語は個々の個人や社会的集團や全国土、そういったものどうしの物質的および精神的な交通を包含している。マルクスとエンゲルスはこの著作のなかで、物質的な交通、なかならず生産過程における人間たちの交通が他のあらゆる交通の土台をなすことを示している。『ドイツ・イデオロギー』のうちにみられる『交通形態』『交通様式』『交通関係』という用語のうちに、じつは当時マルクスとエンゲルスのものできあがりつつあった『生産関係』という概念が顔を出していたのである」（『ドイツ・イデオロギー』国民文庫一七〇ページ）。したがって、Verkehr は「交通」と訳されているが、一般的理解による「交通」とは含意を同じくしない。「通交」「ゆきき(往来)」「接解」「通商」などの訳もあるのは、このためである。

(12) 同じく『ドイツ・イデオロギー』のロシア語版編纂部の注解を底本にしてつくられたドイツ語版編纂部の注解は、Stamm という用語について次のようにのべている。

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

「Stamm」という用語は一九世紀の四〇年代には今よりも大きな役割を歴史学のなかで演じていた。それは一つの同じ祖先から出た人々の共同体をあらわしたのであって、現代の『氏族』(“Gens”)と『部族』という概念を包括していた。これらの概念の厳密な規定と区別はルイス・ヘンリー・モーガンによってその著作『古代社会』あるいは、野蛮から未開を経て文明にいたる人間進歩の路線の研究』(Lewis Henry Morgan, “Ancient Society: or, Researches in the lines of human progress from savagery through barbarism to civilization”) ロンドン、一八七七年、においてはじめて与えられた。この著者のなかでこの傑出した民族学者かつ歴史家ははじめて原始共同秩序の基本細胞としての氏族の意義を明らかにし、これによって原始共同体の全歴史にたいする学問的基礎が与えられた。エンゲルスはその著作『家族、私有財産、国家の起源』(一八八四年)で、モーガンの研究成果を普遍化しつつ、『氏族』および『部族』の概念の内容をあらゆる側面から研究した(同上二七―二八ページ)。

これに対し、村井康男・村田陽一訳『家族、私有財産および国家の起源』(国民文庫)の解説は、次のように指摘している。

「Stamm (tribe: AEMETU 種族)。共通の方言を特徴とする緊密な血縁共同体である。近年わが国ではこの語を『部族』と訳す慣行がひろまってきた。その論拠については、『日本歴史教程』第一冊(白揚社刊、二〇ページ)に伊豆公夫氏の説明がある。すなわち、氏はtribeを『部族』と訳すことを主張して、つぎのように書いている。『従来の……エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』等の邦訳本には、往々『種族』の語が見られるが、これは部族

にあたるものを意味しているようであり、多くの混雑をひきおこしている。本章分担者は『種族』と『部族』を区別し、前者を體質・文化をだいたい同一にする『人種的』集団と規定することにした。そして部族は一つの社会体制を意味しているが、種族はその集合と一致するばあいもあり、そうでないばあいもあり、社会体制的概念とは一応無関係なものとしている。つまり、Stamm (tribe) は『人種的集団』ではなく『社会体制』だから『部族』と訳すべきだ、というのであるが、他方、という外国語が『種族』にあたるかについては全然指示がないので、見当がつかない。ところでわれわれはつぎの理由で、この意見には同意しない。(1) 先史時代の社会における『人種的』集団と『社会体制』とを分離して考えることは、本書(『家族、私有財産および国家の起源』)の全立場と矛盾する。(2) Stamm (tribe) は人為的な構成物ではなく、緊密な原生的血縁団体、つまり『人種的集団』である。スターリンは明瞭にこれを『人種誌学的範疇』と呼び、歴史的範疇である民族から区別している(『マルクス主義と民族問題』一九一三年、五七―五八ページ)。Stamm はもともと本源的な血縁共同体であるが(よく主張されるように氏族が本源的ではない。他方、Stamm 連合、その他の大きな結合体は派生的なものである)、日本語の『部』は、元来なんらかの単位集団の一分肢を意味している。そこで、本書では Stamm にたいし『種族』の訳語を採用し、ただ古代ギリシアおよびローマで血縁 Stamm が解体され、これに変わって政治国家の下部単位としてつくられた地縁 Stamm についてだけ『部族』と訳すことにした。これはもうなんら血縁団体ではなく、その対立物であった。だからである。これに反して国家成立前の Stamm は、たとえ人為的構成

の刻印をとどめているばあいにも、古い自然的な血縁 Stamm の原型にしたがい、同一の方式によって構成されていた。Stamm を、始祖を同じうする人種系統の意味にもちいる例については前述した「種族は親縁関係の近疎（言語の親近性の度合にも）ともよく表示される」によっておのずからいくつかの群に分類される。このおのおの種族群（形質群）が一個別民属である。同じ基幹種属に由来する支民属の群の総体一人種を形成する。ときとして、それはいくつかの大枝属に大別される」。このばあいには『種属』または『属』（たとえばゴート属）と訳した」（前掲書二五六一七ページ）。

なおここで、右の「民属」という訳語について、村田氏は次のようにべている。「Volk」という単語は、いろいろな種類の人間集団や共同体をさすにつかわれる。すなわち、(1)支配者にたいする『人民』、(2)ある国または地域の住民の総称、(3)ある住民部類にぞくする人々の総称、(4)人種系統上の種々の階梯の形質群の総称、(5) Nation と同義、など。こういう種々の語義の全部をあらわしうるような単一の日本語はないから、その意義がどれにあたるかによって訳しかなければならないのであるが、いまここで問題にするのは、このうち第四の用法についてだけである。というのは、本書では Volk という語は、ほとんどこの第四の語義でもちいられているからである。従来はこのばあいには『民族』と訳すのがつねであった。

Nation という語も、ブルジョアの文獻ではいろいろちがった人間共同体をさすのに一樣につかわれている。すなわち、『国民』、『民族』、『人種』、等々である。しかし、マルクス主義的文獻では、スターリンのすぐれた著作『マルクス主義と民族問題』（一九一三

『資本制生産に先行する諸形態』について

年)で、Nation (Hansa) の充実した定義があたえられて以来、このことについての厳密な科学的概念がつくりあげられた。すなわち、『Hansa』とは、言語、領域、経済生活、および、文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基盤として生じた、歴史的に形成された堅固な人間共同体である』（国民文庫版『マルクス主義と民族問題』五〇ページ）このような Nation は、歴史的には、封建的細分状態を克服する資本主義によってはじめて成立し、民族国家の形成とむすびついている。従来、この語義における Nation も『民族』と訳されてきた。

この二つのちがった概念を共通の『民族』という日本語で訳すことから、いろいろな混乱がうまれた。たとえば、マルクス・レーニン主義の民族理論のおしえるところでは、多くの国々にちらばったユダヤ人は一つの民族を構成していないし、ギリシア、ローマの古典的古代には民族はまだ成立しておらず、単一の蒙古民族などというものもありえないのだが、われわれは日常的には世界各地のユダヤ人（ユダヤ人）、蒙古民族や古代ギリシア民族についてかたて、矛盾を感じない。この混乱をとりのぞく唯一の方法は、この二つのちがった概念に二つのちがった単語をもちいることにあるが、国民の日常実践に深くはいつた語法を変更することは容易でない。そこで、一つの試みとして、人種学上の概念、つまり血縁集団をあらわす Volk のばあいには『民属』、地縁的原则に立つ近代的 Nation のばあいには『民族』という文字をあてはめてみた」（同上二五四―五五ページ）。

【II】第二の所有形態——古代の共同体所有ならびに国家所有 antikes Gemeinde- und Staatseigentum

この形態は、若干の種族が、「契約ないし占領」Vertrag oder Eroberung によって、一つの都市を形成するように統合されることから生まれる。このばあい、奴隷制はいいかわらず存続する。共同体所有とならんで、まず動産の私的所有が、のちに不動産の私的所有が発達する。しかし、それらはあくまで「不正常かつ共同体所有にたいして従属的な形態」eine abnorme, dem Gemeindegut untergeordnete Form であらうにすぎない。不動産の私的所有が発展するにつれて、この共同体所有を基礎とする全社会構造は解体し、それとともに民族の力が衰える。奴隷制は存続するのであるが、「国家市民」

Staatsbürger は、ただ共同にその労働する奴隷にたいして支配力をもつにすぎず、それゆえに共同体所有の形態に拘束されている。分業は相当発達しており、すでに「都市と農村の対立」Gegensatz von Stadt und Land があらわれ、のちには都市の利害を代表する国家と、農村的利害を代表する国家との間の対立もあらわれ、また都市自体の内部において、工業と海上貿易との間の対立もあらわれる。市民と奴隷との間の階級関係も、この段階になるとはっきりとみられるようになる。

私有の発達につれて、次のような状態が始めてあらわれる。それは、のちにもっと大きな姿で、近代的私有のばあいにはあらわれてくる。すなわち、一方で私有の集中と、他方での平民的小農民のプロレタリアート化である。私有の集中は、ローマでは非常に早くから始まっており、リキニウスの農地法の示す

とおり、内乱時代から、とくに帝政時代には急速に進行した。この平民小農民のプロレタリアート化にもかかわらず、平民が有産者市民と奴隷との中間的立場にあつたため、プロレタリアートとして独立した存在になることはできなかった。

(13) 『ドイツ・イデオロギー』における所有の第二形態が、「古代の共同体所有ならびに国家所有」と規定されているのはなぜであろうか。私たちは、「国家とは階級抑圧の装置」であるという規定を知っている。この規定によれば、階級のないところ国家はない。しかし、マルクスの右の表題は共同体と国家とを同一視しているのではないかとすると、このことをどのように理解すべきであろうか。

なお、このようなゲルマンの共同体を国家として把える考え方は、『諸形態』でもそのまま引きつがれて、次のようにのべられている。すなわち、マルクスはゲルマンの共同体の特徴を説明するなかで、「共同体は——国家として——、一方ではこの自由平等な私的な所有者相互の關係、外部にたいする彼らの結合であり、また同時に彼らの保障でもある」とのべているのである。この点については、あとで『資本制生産に先行する諸形態』論での本源的所有の第二形態を検討するさいに考察しよう。

(14) 動産の私的所有の発展とその役割について、マルクスはその後次のようにのべている。「家畜の形で富にはじまる(そして、農奴の形で富をも可能にする)動産的富の漸次的蓄積の一事、さらにこの動産的要素が農業そのものなから果たすますます顕著な役割、この蓄積と不可分である他の多くの諸事情——この説明をする



と深入りしすぎることになるだろう——、これらすべてのことが、経済的および社会的平等を解体するものとして作用し、共同体の内部に利害の衝突をおこさせるであろう。この衝突は、まず耕地が私有財産に転化することにはじまり、すでに私有財産の共同体的付属物になっている森林、牧地、荒蕪地などまでも、私的占有にいたるのである」(ヴェラ・ザスリーツヘの手紙「草稿、手島正義訳『資本主義的生産に先行する諸形態』國民文庫一〇〇ページ)。

〔Ⅲ〕 第三の所有形態——封建的または身分的所有 *feudales oder ständisches Eigentum*

古代が、都市とその小領域とから出発したとすれば、中世は、農村から出発した。なぜなら、広大な土地のうえに分散された稀薄な人口が、占領者たちが加わってきたことによっても、なんらいちじるしい人口増加をこうむらなかつたからである。

ローマ帝国没落の最後の数世紀間と、未開人自身による占領とは、大量の生産諸力を破壊し、農耕を沈滞させ、工業は、販路の欠乏から衰退し、商業はゆきづまり、または暴力的に中断され、農村と都市の人口は減少した。封建的所有とは、このような諸事情のもとで、占領の組織様式とゲルマン兵制によつてもたらされたものである。封建的所有そのものは種族所有や共同体所有と同様に、一つの共同体制 *Gemeinwesen* を基礎としていた。ただ直接生産階級として、古代的共同体にたいしては、奴隷が対立していたのに反して、ここでは、農奴的小農民 *leib eigene kleine Bauern* が対立したのである。土地所

『資本制生産に先行する諸形態』について

有の封建的編成は生産者である被支配階級に対する一つの連合であり、この点は古代の共同体所有のばあいと同じである。都市では、組合的所有 *Korporatives Eigentum*、すなわち、手工業の封建的組織 *feudale Organisation Handwerks* が、主として個々人の労働のうえに成立した。各種の手工業同職組合 *Zünfte* がこれである。個々の手工業者たちがしだいに小さな資本を蓄積して行ったことと、都市人口の増加にもかわらず、彼ら手工業者の数が変動しないことによつて、職人・徒弟関係 *Gesellen- und Lehrlings-verhältnis* が展開し、都市のなかにも、農村におけると同様な位階制 *Hierarchie* が発展する。このように、封建制の時期には、所有の主要な形態は、一方では土地所有であり、それには土地に緊縛された農奴を伴つており、他方では個人労働の所有であつて、これには職人たちの労働を支配する小資本が伴っている。そのいづれにあつても、その組織は、制限的な生産条件——すなわち小規模で原始的な土地耕作と手工業型の工業——によつて規定されていた。

分業は、封建制の最盛期でも微々たるものであつた。どこの国にも、都市と農村との対立があり、身分的編成は、鋭くあらわれていた。分業は、まず農耕部面では、家内工業を内包した零細農耕制のために困難であり、また都市の工業部面では、個々の手工業の内部で、まったくみられず、ただ個々の手工業と手工業との間で、わずかにみられたにすぎなかつた。さて、この段階では、それより大きい地域がいくつか集つて

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

封建王国をつくることは、土地貴族にとつても都市にとつても必要であった。したがって、支配階級である貴族の組織は、どこでも一人の君主を頭にいただいていたのである。

以上みたように『ドイツ・イデオロギー』でのマルクスとエングルスの見解はきわめて簡単ではあるが、人間の本源的所有が、いたるところで、「種族」Stamm という血縁団体による共同的所有であったこと、「じつさい……最近の法制史研究が確認したところによれば、ローマにおいても、またゲルマン、ケルト、およびスラブの諸民族のもとでも、所有の発展は共同体的所有または種族的所有を出発点としており、真の私的所有はどこでも寡奪によって発生した」ことを指摘している。

このような把握の仕方は、そのご『経済学批判』序説の第一章「生産」のなかで、マルクスは、「われわれが、歴史を、遠くさかのぼればのぼるほど、それだけ個人、したがって生産を営む個人は、非独立的なものとして、より大きな全体に属するものとしてあらわれる。すなわち最初は、またまったく自然的な仕方、家族のなかに、また種族にまで拡大された<sup>(15)</sup>家族<sup>(16)</sup>のなかに、そして後には、諸種族の対立や融和から生ずる、種々な形態の共同体のなかにあらわれるのである」とのべており、また同じ章のなかで、「歴史は、むしろ（例えばインド人やスラヴ人や古代ケルト人などのおける）共同所有 Gemeinbesitz を、本源の形態 ursprüngliche Form として示しており、それは、共同体所有 Gemeinbesitz ということ、なお長い

間、重要な役割を演じている」として、より明瞭に強調されている。

(15) その後、このマルクスの誤まった理解について、エンゲルスは『資本論』第三版への注で、次のようにのべている。「人類の原始状態に関するその後の極めて根本的な研究によって著者の達した結論によれば、本源的には家族が種族に発達したのではなく、逆に種族こそ、血縁関係にもとづく人類社会形成の本源的自然発生的形態だったのであり、かくして、種族的紐帯が弛みはじめたところからやっと後にいたり、非常に相異なる家族諸形態が発展したのである」(長谷部訳、青木文庫、③五八六ページ)。

マルクスの家族が拡大して種族となったという誤まった理解は、その後の研究、とくにアメリカの民族学者L・H・モルガンの研究によって訂正された。すなわち、モルガンの学説の大きな功績は、前階級社会の基本が氏族であり、この社会がその構造からいえば、氏族社会であることを発見した点にある。

周知のように、エンゲルスは、「父権氏族の前段階をなすものとして原始的な母権氏族が再発見されたことは、ダーウィンの進化論が生物学にたいし、マルクスの剰余価値学説が経済学にたいするのと同一の意義を、原始史学にたいしてもつものである」と、『家族私有財産および国家の起源』の一八九一年の第四版の序文で評価しているが、モルガンは、氏族の発生は人類の出現と同時のことではなく、氏族社会は人類発展のかなり後の段階であることを指摘し、このことによって、階級成立以前の人類の全歴史は前氏族時代と氏族社会の時代という二大時期に分けられることを明らかにしたので

ある。

この点について、ユ・イ・セミヨノフは「原始史の時期区分について」(『ソビエト民族学』一九六五年第五号、林基訳、『専修人文論集』第五号、一九七〇年六月)で次のようにのべている。すなわち、モルガンの研究にもかかわらず、当時の学界の状態では、氏族組織が成立したのは何時かという問題にも、それに先立ったものは何であつたかという問題にも解答を与えることはできなかったが、その後、人類の氏族以前の状態の問題は次第に解明されはじめてきた。

原始史の真の時期区分をつくるのに巨大な意義をもっているのは、ゴリーキー宛の手紙(一九一三年一月)にふくまれているレーニンの有名な言葉である。その中でレーニンは、神とは、個性を社会に結びつけ、動物的個性主義をおさえつけることを目的として、社会的感情をめざめさせ、組織する觀念の総体である、というゴリーキーの規定の本質がどこにあるかをばくろして、次のように書いている。「何故これが反動的なのでしょう？動物性の『抑制』という坊主的農奴主的觀念を潤色しているからです。実際に『動物的個性主義』を抑制したのは神の觀念ではなく、それを抑圧したのはじつに原始群であり、原始コミュニティでありました」(レーニン全集第三五巻一―二五ページ)と。

ポグダノフの著書『経済学小教程』にたいするレーニンの書評(全集第四巻四二、四五ページ)や著書『国家と革命』(全集第二五巻四二〇―一ページ)から明らかなように、レーニンが原始コミュニティといっているのは氏族コミュニティ、氏族のことである。レーニンが「原始群」という語でさしているのは、前後関係から明らか

### 『資本制生産に先行する諸形態』について

かなように、人々の結合の最初の形態、それに先行する動物の群から直接に生まれ、原始氏族コミュニティに転化するまで存在した原初の人間集団のことである。原始群の時期の本質は、成立しつつある社会関係が動物的個性主義をおさえつけ、社会的なものとなつたものが闘争する時期、いいかえれば人間社会が成立し、形成される時代だということにある。レーニンは、この時期の本質を明らかにし、それを指すために正確ではっきりした用語「原始人群」を用いはじめただけでなく、真の人間社会は具体的にはどんな形で生まれたかという問題にも答を与えた。すなわち、それは原始群に氏族がとって代るとともに氏族社会の形で現われること、このことによつて、真の人間社会の最初の具体的歴史的な形態、その発展の第一段階である氏族社会の本質を明らかにしたのである。現在では、ソビエトの大多数の学者は原始人群の時期を一つの時代とし、これを人間と社会の形成期とみなしている。そして、人間の歴史は、何よりもまず原始人群の時期(人間社会が形成されていく時期)と人間社会の歴史(出来上つた社会が発展する時期)に二大別される。そこで、この見解を採用すれば、原始共同体的社会経済構成体という概念の再検討が必要となる。なぜなら、この用語で、二つの比べることのできない大きさのもの、人類史の二大主要時期の一つである形成期の社会の時期と次の主要時期である形成された社会の発展期のうちの一段階とがひとまとめにされ、何かまとまつたひとつのものとしてみられているからである。実際には、最初の社会構成体は、つまり人類社会の存在の最初の具体的歴史的形態は氏族社会なのである。

生産関係の型を示し、そのことによつてこれらの社会経済構成体

の本質を明示する「奴隸制社会」「封建社会」などの概念とちがって、「原始共同体的構成体」という用語は生産関係の特質を表現しない。「原始共同体」という用語はきわめてあいまい不明確であるため、きわめてさまざまな社会形態をさして用いられてきたし、また現に用いられている。ネアンデルタール人の原始群も、母系氏族コミュニティも、家父長的氏族、大家族、さらに近隣共同体までが原始共同体とされているのである。マルクス主義の古典では「原始共同体的構成体」という用語は決してどこにも使われていない。

「原始共同体」という用語は、モルガンの『古代社会』を知る前に書かれたマルクスとエンゲルスの著作に他の用語とならんでみられる。エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』ではこの語はみられない。エンゲルスはここではつねに氏族体制・氏族社会・古コミュニティズム・共産主義的共同体といっている（マルクス・エンゲルス全集第二巻二六（岩波文庫戸原訳一〇）、五四（六七）五六（七〇）、九七（一二七）、九八（一二八）、一〇八（一四二）、一六四（二一七）、一六八（二三三）、一七四（二三〇）、一七六（二三三）各ページその他）。レーニンも決して「原始共同体」（オプシチナ）という語を用いてはいない。彼は「氏族組織」「クラン社会」「原始コミュニティ」「原始共産主義」「原始的氏族共産主義」といっている（レーニン全集第一巻一四四、第四卷四二、第二五卷第二五卷四二一、第二九卷四八一、第三五卷一三五各ページ）。

一九二〇—三〇年代のソビエト文献でもっともしばしばみられたのは「氏族社会」「原始共産主義社会」「原始氏族コミュニティ」という用語であった。それが使われなくなったのはスターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』の刊行後のことで、この論文のなかで

はじめて「原始共同体体制」という語があらわれたのである。われわれの考えでは、これらの「氏族社会」「原始共産主義社会」「原始的氏族共産主義」といった用語こそがもっとも適切なものである。その長所は、それらが生産関係の型を指示し、それによって社会構成体の本質を表現している点にある。最初の社会経済構成体は氏族の原始共産主義構成体である（『専修人文論集』五号九五—九九ページ参照）。

(16) 『諸形態』には、それゆえ、当時の家族史学の未成立を反映して、一定の限界があった。

そこで次に、マルクスの『資本制生産に先行する諸形態』論の考察に先立って、その前提としてひとまず「動物的人間」から「人間の人間」への移行、および史的唯物論についての理解を簡単に注記しておく。

マルクス経済学は、「唯物史観」または「史的唯物論」とよばれる人間社会の歴史についての科学的見方の資本主義社会への適用であり、この「唯物史観」は、「唯物弁証法」または「弁証法的唯物論」とよばれる世界観・哲学の社会への適用である。マルクスの発見した人間社会の歴史についての科学的見方によって、人類はなぜ原始共産社会から今日の資本主義社会をへて社会主義社会へ移行するのかという、「社会発展の法則」がはじめて明らかになった。「唯物史観」によってのみ、「社会発展史」をはじめて科学的に説明できるのである。

「唯物史観」は「社会発展史」の理論的総括であり、社会発展の法則の抽象的本質的説明であるのに対し、「社会発展史」は「唯物史観」の歴史的具体化であり、その実証的説明である。それゆえ、

この両者は離すことのできない関係にある。

マルクスのいうように、人間社会の歴史的發展や社会革命の仕方に客観的法則があるなら、主観、観念によつては、これらの法則を変えることも否定することもできないはずである。したがつて、唯物史観を学ぶことは、主観的なものの見方、考え方を否定し、世間に流行しているもっともらしい観念論者の諸思想に反対して、科学的社會観を確立することにほかならない。

マルクスは『資本論』で、資本主義から社会主義への移行が必ず起ることを明らかにし、「市民社会の解剖は、これを経済学のうちにもとめるべきである」(『経済学批判序説』)として、社会生活のいろいろな領域のなから、経済関係を、それ以外のすべての関係、すなわち法律関係や、国家形態、および社会的・政治的・精神的な生活などを規定する、基本的な、本源的なものとして取り出しているが、このような、経済関係を重視し、社会發展的法則をとく鍵をそこに求める考え方は、マルクスが「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(一八四五年春執筆)でその大綱を完了し、『ドイツ・イデオロギー』(一八四五―一八四六年)で展開し、『経済学批判』(一八六七年)の序言で定式化したところの、マルクスの「唯物史観」とか「史的唯物論」とよばれる考え方にほかならない。

エンゲルスはマルクスの葬送のことで、「ダーウィンが有機的自然的發展法則を発見したように、マルクスは人間の歴史的發展法則を発見した」とのべ、その歴史の意義をきわめて高く評価した。すなわち、今から一〇年近くまえ、ダーウィンは「進化論」とよばれる彼の学説(『種の起源』一八五九年)で、世界のあらゆる生物は、低級な生物からしだいに高等な動物物へと進化、發展してき

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

たのであって、人類もはじめから今日のような人間として神によつてつくられたものではないことを明らかにした。しかし、ダーウィンは、なぜある種の猿類が今日の人間に変わったかという点については、解答を与えなかった。この解答はマルクスによつて与えられた。

人間の歴史とは、人間の社会の歴史にほかならないのであるが、この社会發展の客観的法則は、マルクス自身によつて『経済学批判』の序言のなかで定式化されている。この有名な定式においてのべられている要点を簡条書にすると次のごとくである。

(1)人間はその社会的な生活の生産において、ある与えられた生産関係にはいる。

(2)この生産関係は生産力の一定の發展段階に対応する。

(3)生産關係の總体は社会的な經濟的構造を形づくる。

(4)社会の經濟的構造は現實の土台である。

(5)この土台のうえに法律的・政治的な上部構造が立つ、

(6)また、この土台に照応して社会的意識諸形態が生まれる。

(7)物質的生活の生産様式が社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づけ、規定する。

(8)人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に人間の社会的存在が彼らの意識を規定する。

(9)生産力は当初その發展のために役立った生産關係(その法律的な表現である所有關係)とやがて矛盾するようになり、生産力發展の桎梏となる。このとき社会革命の時代がはじまる。

(10)經濟的基礎の変化とともに、巨大な全上部構造が徐々に、あるいは急速に変革される。

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

一一二

(II)このような変革の考察にあたっては、自然科学の正確さで確認できる経済的生産条件と、イデオロギーの衝突・闘争を区別しなければならぬ。

(III)変革の時代は、その時代の意識から判断するのではなく、生産力と生産関係の矛盾から説明しなければならない。

(IV)一つの社会構成体は、それがいれうるだけのすべての生産力が発展しきるまでは、決して没落するものではない。

(V)また、新しい、より高度の生産関係は、旧社会自体の胎内でその物質的条件が孵化し終るまでは、決して旧社会にとつてかわることはできない。

(VI)大づかみにいって経済的社会構成体のあいつく諸時代として、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的の生産様式をあげる事ができる。

(VII)ブルジョア的の生産関係は、社会的生産過程の最後の階級的形態である。

(VIII)ブルジョア社会の胎内に発展しつつある生産力は、同時にこの社会の敵対の解決のための物質的条件をつくりだす。

(IX)だから人間社会の前身はブルジョア社会とともに消滅する。

マルクスとエンゲルスが、新しい世界観を形成するにあたって第一に強調したことは、人間的存在の、したがってまたあらゆる人間の歴史の前提をなすものは何であるかを、まず確認することであった。そして、彼らは、この確認すべき前提を、人間による自分自身の生産と子孫の生産であるとした。すなわち、『家族、私有財産および国家の起源』一八八四年初版の序文のなかで晩年のエンゲルスは、「唯物論的な見解によれば、歴史における究極的決定的契機

は、直接的生命の生産および再生産である。しかしこれは、それ自体さらに二とおりにわけられる。一方では、生活手段の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖である」とのべており、また『ドイツ・イデオロギー』のなかで青年マルクスとエンゲルスは、「第一に、人間は生きるためには生活することが出来なければならぬ。そして生活するためには飲食、住居、衣服、その他のものがどうしても必要である。したがって人間が最初になした歴史的行為はこれら衣・食・住に対する欲望充足手段の生産、すなわち物質的生活そのものの生産である」とのべていた。つまり、「歴史をつくり」うるためには、人間はまず生活すること、生産することができないればならないとしているのである。

この「前提」は人間社会存在の根源的なことからあり、あまりにも当然きわまることである。そして、そうだからこそまた、歴史をつくりうるためのこの「前提」は決して独断ではなく、何人も否定できない明白な事実なのである。マルクスはこの点を簡明瞭に、「人間は意識とか宗教とか、その他かつてなものによって、動物から区別することができる。だが、人間自身は、彼らが生活資料を生産しはじめるやいなや、自分を動物から区別しはじめる」とのべている。

人間は生産する動物である。生産することによって他の動物とは異なる人間となり、他の動物とは異なる生活を営むようになる。今日、動物とはちがうところの人間のもっている特性は、人間が労働して生産物を生産するところから生まれたのである。人間の肉体、頭脳、言語、科学的知識、精神生活等々は、人間労働の成果であ

り、また、のちに説明する剰余生産物の生産こそは、文化発展の物質的基礎であり、前提である。もし人間が労働し生産することがないなら、今日の人間と人間社会は存在しない。

現在地球上に住んでいるヒトは、ホモ・サピエンス *Homo sapiens* ただ一種であり、哺乳類の一員である。ヒトはサルとよく似ているが、両者にはいろいろな点で生物学的にも差異がある。これらの差異は、脳の発達と直立歩行の二点にしばることができるといわれているが、なぜこの二点の特徴が生まれたかといえ、それは労働の結果である。

今日までの科学的研究によると、人類の祖先であるヒトニザル（類人猿）が地上に出現したのは、約三〇〇〇〜二五〇〇万年前である、といわれており、類人猿が人間に変化したのは、おおよそ五、六〇万年から一〇〇万年ほどまえである、といわれている。世界各地の猿人の骨や化石、地層などの考古学や地質学の研究は、今日の人類の祖先がサル的一种であることを立証している。かれらは物をかみくだく必要のため、アゴの骨と歯が発達しており、脳容積は小さく、額が狭く、目の上の骨が突き出ている。これは発掘された原始人の遺骨によって知ることができるが、いまだに化石となつて発見された人類の主なものとは次のとおりである。

まず、オーストラロピテクス *Australopithecus* に代表される「猿人」である。オーストラロピテクス類は、約二〇〇万年から七〇万年まえの人類の仲間である。一九二四年に南アフリカで発見され、その一九五九年に東アフリカでも発見された。頭の大きさはゴリラと大差ないが、二本足で歩いており、すでに棍棒や骨や石器を使つており、石器の伴出によって原始文化の存在も証明されてい

『資本制生産に先行する諸形態』について

る。

次に、ピテカントロプス *Pithecanthropus* と、シナントロプス・ペキネンシス *Sinanthropus pekinensis* によって代表される「原人」である。ピテカントロプス（直立猿人）はまたジャワ猿人ともいう。この化石は、一八九〇年から一九〇〇年にかけて、ジャワのソロ川の近くでオランダの軍医デュボアによって発掘された。一九二三年に中国の北京の南西四キロにある周口店竜骨山で発見された「北京原人（シナントロプス・ペキネンシス）」、さらに一九三一年にわが国で発見された「明石原人（ニッポントロプス・アカシエンス）」も、ピテカントロプスにはいる。四、五〇万年まえから二〇万年まえの地球に住んでいた人類で、火を使つていたことがわかっている、火を使用しはじめた人類は、これで猛獣を追いはらい、寒さをしのぎ、肉を焼き、食物を煮ることをおぼえた。

「原人」の次に現われたのが「旧人」つまりネアンデルタール人 *Homo neanderthalensis* である。これは一八五六年にドイツのデュッセルドルフの近くのネアンデルタールという渓谷から鉄道工事のさいに発掘されたものであり、そのヨーロッパ、アフリカ、ジャワでも多数発見されている。約一五万年から五万年まえの人類である。

次に「新人」が活躍し始める。「新人」はホモ・サピエンス・フォッシリス *Homo sapiens fossilis*（化石現生人類）という学名からわかるように、現在のヒト（ホモ・サピエンス）とほとんど変わらない。ヨーロッパで発掘された「クロマニヨン人」、「シャンスラード人」、「グリマルディ人」、中国の「上洞人」などがこれにはいる。年代はだいたい五、六万年まえである。これらの化石人類のな

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

かには早くも人種的な特徴が認められ、人種の区分が早くからあったことが考えられる。「新人」の時代には石器が急激に種類を増し、その型も石刃(ブレード)といわれる両刃の精巧なものになったが、それだけでなく、絵画や彫刻、その他あらゆる面にホモ・サピエンスの知能は發揮され、ここにオリヤック、ソリユートレ、マドレーヌ(年代順)のけんらんたる文化が花咲いたのである。また彼らは「旧人」以上に腕のよい狩人で、トナカイやマンモス、野ウマなどを集団で狩り、落し穴も使った。このようにして、氷河というきびしい試練に耐え、しかもこれを克服した人類は、ヴェルム水期が一五、〇〇年まえに終って後水期にはいると、文化再編成の時代である中石器時代をへて、新石器時代の牧畜・農耕生活へと歩みを進める。すなわち、西アジアでは紀元前六、〇〇〇年ごろには、自生しているムギ類の栽培、ヒツジやウシなどの家畜化がおこなわれ、これの営まれる原始農村がやがて大きくなり、ここに最古の文明が生み出されるような基盤ができた。このころの人類は、有名なフランスのラスコー洞窟や、スペインのアルタミラ洞窟の壁に、野牛やシカの絵を残している。

これらの過去の人類が今日の人類の直系の祖先かどうかは疑問であるが、ただ今日の人類がオーストラロピテクスの段階をへて、現代人にまで進化してきたことは確かである。「サルが人間に進化した」というのは、この意味である。

人類の先祖がこのようなものであったということが明らかにしたのは、そんなに古いことではないが、当初、「サルが人間に進化した」ということを認めることは、人間を畜生にまで低める俗悪な思想であり、神を冒瀆する考えである、として多くの人に反対さ

れ、コペルニクスの地動説のばあいと同様の運命を担った。

人類は樹上生活によってあと足とまえ足のはたらきが分化し、地上生活によってあと足で歩きはじめ(直立歩行)、手で道具を使用することによって、ある種の類人猿(ある原始人)は他のいっさいの動物から区別される第一歩をふみ出した。彼らの獲物をねらった石と棍棒の一ふりは、人間の労働の始まりである。石と棍棒から原子力とオートメーションに至る歩みのなかで、人類は社会を發展させ、文化を開花させ、今日の人間そのものをつくりだしたのである。もっとも人間以外の動物でも生産しているのではないかという主張もあるかも知れない。というのは、ある種の動物は巢や住居をつくっているからである。しかし、動物は自分やその子どもたちが直接必要としているものだけを本能的に生産しているにすぎない。だから、動物の生産は「本能的」であり、「一面的」である。ところが、人間は自分自身の直接的欲望から離れて、「一般的」に生産する。それゆえマルクスは、「動物は自分自身だけを生産する。ところが、人間は全自然を再生産する」(『経済学・哲学手稿』)と語っているのであって、社会科学はこのきわめて当然な事実の確認から出発すべきである。マルクスの唯物史観は「人間とは労働する動物である」という事実の認識から出発する。

エンゲルスは一九〇九年九月二一日付のJ・プロッホ宛の手紙において、「唯物史観にしたがえば、歴史における究極の決定的要因は現実的生活の生産および再生産である……。それ以上のことは、マルクスも私もかつて主張したことがない」(『マルクス・エンゲルス選集』一五卷五二七ページ)といっている。マルクスは『経済学批判序説』の「序言」の「一般的結論」で、この「歴史における究



極の決定的要因」を「生活の社会的再生産」とよんでいた。

人間は生産活動においてのみ人間となりえたのであるが、人間の生産には二つの側面がある。一つは人間が自然に働きかける側面である。これを生産力側面とよぶ。ここでいう生産とは、人間が自然に働きかけて、物質的生活資料を生産するさいに發揮する力である。生産のもう一つの側面は、生産において人と人とが取りむすぶ関係、すなわち生産関係の側面である。

生産力 Produktionskraft とは、一口でいえば、人間が自然へ働きかける力である。この生産力の構成要素は、労働力 Arbeitskraft と、生産手段 Produktionsmittel の二つに分けられる。労働力は生産の主体である人間の精神的・肉体的能力にほかならず、生産手段とは、広く解釈すれば、文字通り生産物をつくるために役立つ、いっさいの手段である。だから、生産をおこなう人間が生産手段を用いて自然に働きかけ、自然を人間の生存に適するようにつくりかえたり、自然の諸力を利用する力が生産力にほかならない。生産手段は、さらに労働手段と労働対象との二つから成り立っている。

労働手段とは、人間が労働対象に働きかけ、その対象を人間にとって有用なものに変えるさいに用いる、いっさいの要具のことである。それは、いわば人間が自分と労働対象との間に介在させ、この対象に対する生産的労働の伝導体として使用するところのすべてのもの（技術体系）である、といつてよい。労働手段はまず、生産の筋骨系統（機械・道具などのような機械的労働手段の総体）と、生産の脈管系統（管、桶、籠、壺、パイプ、タンクなどのような、労働対象の容器としてだけ役立つ労働手段の総体）とに分けられ、さらに広い意味の労働手段ということには、土地、生産用建物、道

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

路、運河、倉庫などもふくまれている。しかし、労働手段のなかでもっとも決定的な役割を果たすものは、生産の筋骨系統に属するものであり、これはとくに生産用具（狭い意味での労働手段）とよばれている。そして、この生産用具そのものの発達水準は、自然に対する人類の支配・利用の程度をはかる尺度であり、社会的生産の発達程度を示す基準である。つまり、社会の経済的発展段階を区別するものは、何を生産するかでなくて、どのような生産用具を使って、どのように生産するか、ということなのである。

労働対象とは、人間が労働するばあいに働きかける対象であって、これは土地、木材、鉱石などのように、直接自然そのものから得られるものと、紡績業で使用される綿花や綿糸のように、すでに人間の労働によつて加工されているもの（原料、原材料）とがある。

さて、生産力の構成要素は、さきへのべたように、生産手段と労働力であると考えられている。広義の生産の理解としてはこれでよいであろう。しかし、より狭い意味では、生産用具と労働力をさしていう。というのは、まえにのべたように、労働手段のなかでも、生産の筋骨体系とマルクスがよんだところの機械的労働手段である労働用具こそが、社会のそのときどきの生産を決定的に特徴づけるものだからである。

ある社会の発達度をきめるのは、何が生産されていたかではなく、いかなる労働用具を使用していたかということである。生産力が高いか低いかということとは、人間が自然の性質や法則を理解し、それを社会生活に役立たせる程度が進んでいるか、おくられているか、ということである。科学や技術の応用、機械設備の採用、発

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

明、改良などは、生産力発展の主要な原因である。

生産におけるもう一つの側面は、生産にあたって人間どうしが互にある関係結んで労働するという、人と人との結びつきの関係である。これが生産関係 Produktionsverhältnis である。

人間は生産にあたって自然に働きかける。しかし、このばあい個々の人間がばらばらに働くのではなく、集団的に人と人が一定の関係を結んで労働する。だから人間の生産は社会的な生産である。孤立した人間などは生きて行くことが許されなかったのである。

人間はその生活の社会的生産をおこなうばあい、それぞれの歴史のある発展段階での生産関係のなかで生産する。生産において人と人がとり結ぶ関係のなかでもっとも基本的な関係は、生産手段に対する人々の関係である。つまり、生産手段を誰が所有しているか、ということである。もし生産手段がある特定の集団に所有されているなら、その結果はその生産物の分配にも影響するのである。当然生産手段の所有者は多くのものを手に入れるであろう。また生産手段を所有していない人々の労働条件も、その状態も、当然異なってくる。こうして、生産手段を誰が所有しており、その生産物はどのように分配され、現実の生産者はどのような状態におかれているか、ということが、生産における人と人との関係のおもな内容となる。したがって、生産関係は階級社会では階級関係なのである。たとえば、封建社会とか資本主義社会での生産関係は、この生産手段の所有・非所有と、そこでの生産物の分配、および労働者の状態を基本的標識として区別されるのである。

生産関係のなかには、直接的生産過程での人間のとりに結ぶ関係のほか、分配、交換、消費の諸過程での人間関係もふくまれる。な

ぜなら、生産は社会的に不断に反復されなくてはならず、したがって生産は再生産であって、直接的生産過程と同時に流通、消費の諸過程もふくまれているからである。

さて、人々はいずれにしても何らかの生産関係のもとに生まれ、そのなかで生存し、労働する。しかし、このばあい、個々の人間はこれらの生産関係を自分の意志でつくりだしたのでもなく、えらびとったのでもない。これらの生産関係は、歴史の必然として、生産力の一定の発展段階のもとで生み出されたものとして、個々人にたいして与えられたものとして存在している。

生産関係とは生産における人と人との関係であり、階級社会では結局階級と階級との関係であり、階級とは、一口でいえば、生産手段を独占的に所有し、他人を搾取している人間集団と、生産手段をもたないために他人に搾取されている人間集団を意味することばである。

レーニンは「偉大なる創意」という論文で階級とその消滅について次のような説明を与えている。

「階級とよばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかで占めるその地位が、(1)生産手段にたいするその関係(その大部分は法律によって確認され成文化されている)が、(2)社会的組織のなかでのその役割が、したがって、(3)その自由にしうる社会的富のわけまえをうけとる方法とその大きさが、他とちがうひとびとの大きな集団である。階級とは一定の社会経済制度のなかで占めるその地位がちがうことによつて、そのうちの一方が他方の労働をわがものとすることができるような、人間の集団を言うのである。階級を完全に廃絶するためには、搾取者、すなわち地主と資本家を打倒

する必要がありはかりでなく、彼らの所有を廃止する必要がありはかりでなく、さらに、生産手段のあらゆる私的所有を廃止する必要があり、都市と農村の区別をも、肉体労働者と精神労働者の区別をも廃止する必要がある。これをなしとげるには、生産力の発展における巨大な進歩が必要であり、小規模生産の数多くの残存物の抵抗（しばしば受動的な抵抗——それはとくに頑強であり、克服するのはとくに困難である）を克服する必要があり、またこれらの残存物と結びついた習慣と因習との巨大な力を克服する必要がある」（『レーニン全集』第二九卷四二五ページ）。

レーニンはマルクスと同様に、「形成されるまえに人間の意識を通過する関係」である「イデオロギイ的な社会関係」と、「人間の意識を通過しないで形成される関係」である「物質的社会関係」との区別を強調した。「生産関係は物質的社会関係である。人間は生産物を交換することによって生産関係にはいりこむが、ここに社会的生産関係があることを意識さえないで、そうする」（『人民の友』とはなにか、『レーニン全集』第一卷一三三ページ）。

史的唯物論の確立以前には、人々は社会問題をすべてイデオロギイ的な見地から解釈し、物質的社会関係の見地からみることに気づいていなかった。だから、ある社会がどんな社会であるかということとは、すべて人々がどう考えるかによってきめられていた。したがって、ある社会がどのような関係を基本として成立しているかをきめる客観的な基準がなく、社会について論ずることは、それぞれの学者が、自分自身の立てたある「理論」にもとづいて、主観的な解釈をすることにすぎなかった。このため、社会の科学的研究は不可能だったのである。

### 『資本制生産に先行する諸形態』について

ところが、マルクス主義は社会を自然史的發展として把握する。こうすることができたのは、「生産関係」を社会的基本的構造として取り出したからである。社会も、自然と同じように、人間の考え、主観などとは無関係な法則をもっており、それゆえ反復性（くり返し）をもっている。レーニンはこのことを、「物質的社会関係……を分析することによって、反復性と規則性をとみとめて、さまざまな国の制度を社会構成体という一つの基本概念に概括することが、一挙に可能になった。このような概括だけが、社会現象の記述（および理想の見地からする評価）から、これらの現象の厳密に科学的な分析にうつることを可能にしたのである。この科学的分析は、一例をあげれば、一つの資本主義国をべつの資本主義国から区別するところのものを取りさって、それらすべてに共通するものを研究するのである」（同上）と述べている。

この生産関係の総体が、マルクスがさきの「定式」でのべていた「社会の経済構造」である。ある社会の根本・基礎・土台は、マルクスによれば、「社会の経済構造」であり、これがそれぞれ社会の現実の土台なのである。私たちはある社会の土台をこれ以外の何かと考えることができるであろうか。宗教（神とか仏）や法律や、または何らかの政治機構や哲学思想などを、社会の土台と考えることができるであろうか。個人にたまたまはあ、個人生活の土台とは考えられないであろう。人間は考えるまえに生活できなければならない。人間としての生活はどのようにして収入を手にするかという経済問題であろう。だから、基本的には、生産物の生産、流通、交換、分配という経済生活の一部をうけもつことによって、個

々人がその生活を続けられるような生活資料を入手し、その肉体的生活を再生産できること、つまり経済生活を続けることができること、その上に立って始めて個々人は宗教、哲学、学問、芸術などの精神の領域の生活が可能となる。ここで注意しなければならぬことは、だからといって、経済生活が他の精神生活より大切であり、重要な意義をもっている、などと主張することはできない、ただ個人生活の基礎が経済生活だということ、この経済生活がなければ、いっさいの精神生活はない、ということだけである。そして、このように個人生活にとって経済生活が土台であるのと同様に、社会生活にとっても、その社会の経済生活とその仕組み、すなわち社会の経済構造が土台である。この「生産関係の総体」社会の経済的構造「土台」のうえにのみ、この土台にふさわしい上部構造（政治的、法律的、宗教的、芸術的な制度や機関）と、イデオロギー諸形態（政治的、法律的、宗教的、芸術的等々にかんする理論見解）がそびえたつのである。

そして、この上部構造と上部構造の総体が、マルクスのいう「社会構成体」(独 Gesellschaftsformation)であり、「経済的社会構成体」(独 ökonomische Gesellschaftsformation)であり、またレーニンが「社会経済構成体」(露 общество-экономическая формация)である。

「社会構成体」という概念について、「社会構成体」生産関係」であるとの主張もある。そう解釈できるばあいもあるが、「土台プロセス」上部構造」が「社会構成体」である、と理解するほうがよい。レーニンは『人民の友』とはなにかで『資本論』の骨組みについてのべたあと、次のようにのべている。「だが、重要な点は、マ

ルクスがこの骨組みだけでは満足しなかったこと、彼が普通の意味での『経済理論』だけにとどまらなかったこと、彼が——ある社会構成体の構造と発展とをもつばら生産関係によって説明しながらも——それにもかかわらず、この生産関係に照応する上部構造を、つねに、そして、いたるところで追求し、この骨組みを肉と血でつんだことにある。このためにこそ『資本論』は……資本主義的社会構成体の全体を、生きた構成体として……読者にしめしたのである」(同上 一三四ページ)。

ここでレーニンがいつているように、あくまでも生産関係(土台)を基本にすえながらも、上部構造の全体をつつみこみ、土台と上部構造を生きた統一としてとらえる概念、それが経済的社会構成体という概念である、と理解するのが正しいと思う。

一口に「社会」というばあいには、生産力の一定の発展段階にふさわしい生産関係の全体のことであり、それはたとえ封建社会とか資本主義社会とかよばれる。だから、封建社会や資本主義社会の生産関係の総体(経済的構造)は、封建社会や資本主義社会の土台である。そして、社会を封建社会、資本主義社会へと発展させてきた推進力は、それぞれの社会形態の内部で発展しつづけてきた生産力なのである。生産力は社会の土台(生産関係の総体)のなかにふくまれていないと同時に、それと離れては存在しない。

社会の「生産関係の総体(経済的構造)」土台」は、その社会のなかの人間の考え方に影響し、それぞれ社会の支配階級は、それにふさわしい政治的、法律的、宗教的、芸術的、宗教的等々の制度と理論をつくりだす。だから、ある社会の支配階級の思想を、この思想を生み出した支配階級から切りはなし、それを独立化し、これらの思想

が生まれた条件や、それらを生み出した人々を無視して、ある時代にある思想が支配していた、などと考えることはできない。思想の根底に横たわる個人たちや世情を省略してしまうならば、その結果は、たとえば貴族が支配していた時代には忠孝とか名誉などの諸概念が、ブルジョア階級の支配のときには自由、平等、反封建、富国強兵、科学と民主主義などの諸概念——このブルジョアの貨幣所有にとってもっともふさわしい思想——が支配していた、ということになってしまふ。だが実は、忠孝とか名誉とかの概念は封建的貴族社会にもっともふさわしい盲目的服従の思想として生み出されたものであり、自由、平等などの概念は、ブルジョアの貨幣所有者が、貨幣のまえにはすべてが自由、平等であり、富国強兵や科学と民主主義などというスローガンこそは、資本の発展にとってもっとも好ましいものである、ということにすぎない。事実、貨幣の非所有者にとつては、ブルジョア社会は不自由、不平等であり、万人にひとしく保証されている所有権すら、無所有者にとつては反対に無所有の強制へと転化させられている（なぜなら、巨大な財産の所有を保護するといふことは、彼らの財産による他人つまり貧者の搾取を合法化することだからである）ことは、日常の経験の示すとおりである。

生産力が発展すると、一定の時点で生産関係が変革され、生産関係の総体である土台が変化する。この土台の変化とともに、巨大な上部構造が徐々に、または急激に変化する。このばあい、生産力発展の基礎は経済的な生産条件の変化であり、とくに労働用具の発明、発展である。

すなわち、(1)粗石器から弓矢への移行と、これにともなう狩猟生

### 『資本制生産に先行する諸形態』について

活から動物の飼育、原始的牧畜は、原始共産社会の生産力水準を規定し、(2)石器から鉄製の斧、鉄の刃先をつけた犁などの金属製器具の生産は農業発展の基礎となり、ここに剰余生産物の生産が可能となり、これらの道具が奴隷制社会の生産力を形成し、(3)材料加工のための金属製器具のいっそうの改良、鉄製鋤や織器の普及、鍛冶用ふいごへの移行、陶器生産への移行、これに照応して手工業の発達、手工業の農業からの分離、独立した手工業生産の発達と、それにつづいてマニファクチュア生産の発達は封建社会の生産力を形成し、(4)手工業的生産用具から機械への移行と、手工業マニファクチュア生産から機械工業への転化、機械体系への移行と現代的な機械化された大工業の出現は資本制社会の生産力を形成したのである。

経済的な生産条件の変化は自然科学的に正確に確認できるが、それにつれてイデオロギーの面でも衝突（たとえば地主の利益と産業資本家の利益の対立のイデオロギーでの闘いが、産業資本家の代弁者としてのリカードと地主の代弁者としてのマルサスの論争として「穀物条例」をめぐる展開されたように）が起こる。しかし、この両者は区別しなければならぬ。また変革の時代は、変革されることころの社会の生み出した意識・理論から、その是非を判断することとはできない。あたかも罪をおかして裁きをうける被告がみずからを裁く資格がないように。

上部構造は直接には生産力の変化を反映しない。それは間接的に、土台（経済的構造）をつうじて、生産力の変化と結びついている。上部構造は土台によって生み出され、土台の性格を反映して形成されるが、ひとたびそれが成立すると、きわめて能動的に強く下

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

部構造に働きかけ、古い土台をうちこわし、新しい土台を維持するため役割を果たす。というのは、元来上部構造が土台によってつくられるのは、新しい土台を確立し強化し維持するためであり、古い上部構造もとも一掃するためだからである。とはいえ、上部構造と下部構造の関係を機械的に考へるのはあやまりである。上部構造は、それがひとたび成立すると、相対的な独自性をもつ。また、これら上部構造の内部の諸分野は、たがいに影響しあう。たとえば政治思想が教育思想に影響したり、教育思想が歴史の見方に影響したりするのである。

マルクスはさらに、「一つの社会構成体は、それがいれうるだけのすべての生産力が発展しきるまでは決して没落するものではない」こと、および「新しい、より高度の生産関係は、旧社会自体の胎内で、その物質的条件が孵化しおわるまでは、決して旧社会にとつてかわることはできない」ことを指摘しているが、この指摘は社会発展の一般的法則をのべたものであって、個々の社会、国家が機械的に原始社会から順序を経て資本主義、社会主義に移行するものだというのではない。また、一國が具体的に、たとえば現代日本の資本主義がどのような状態になったとき、次の社会へ移行できるのか、ということになると、問題はむずかしい。

生産力が発展し、生産関係と矛盾するだけでは、革命の勝利は保証されない。ただ一般的には、革命が成功する条件としては、レーニンが指摘しているように、(1)反動的支配階級の力が弱まり孤立し、支配が維持できないほどの状態にあること、(2)人民大衆がその生活に我慢がなくなり、現状が変わることを求めていること、(3)革命的階級が、あらゆる同盟軍を結集し、統一戦線を強め、支配

階級の内部矛盾を利用して分裂させ、力関係のうえで圧倒的な優位を占めていること、(4)この状態をつくりだすために、真の前衛党が存在し、その戦略・戦術による指導が正しいこと、などがあげられる。「二〇世紀は戦争と革命の世紀である」とレーニンはのべたが、今日もとも必要とされているのは、真の前衛党の存在と、大衆路線による人民の支持、闘争によって、帝国主義を打倒することである。このばあい、前衛党と人民を結びつけるものは大衆路線にほかならず、大衆路線（人民戦争は大衆路線の一形態である）をふみはずすならば、前衛党と人民は離間し、革命は失敗に終る。

さて、周知のように以上の生産力と生産関係の統一が生産様式 *Produktionsweise* とよばれる。すなわち、生産様式とは、人間による自然への働きかけの社会的な仕組みである。生産様式は、人間が労働手段を用いて自然を改造する行為の社会的様式・方法であるから、生産力の発展段階と、その枠のなかで人間が自然への働きかけをおこなう生産関係との二つの要因によって、その生産様式の性格がきめられ、どのような生産様式が支配的であるかによって、たとえば封建社会とか資本主義社会とかの区別が生じる。

ところで、生産様式ということばは、狭くは、直接的生産過程における「生産の仕方」ないし「生産の方法」の意味にも用いられる。この狭義の生産様式、すなわち直接的生産過程における生産の仕方ないし生産の方法は、生産・分配・交換・消費の過程に影響を与える。たとえば、『経済学批判』の「序言」で、「物質的生活の生産様式は社会的、政治的、精神的な生活過程の一般を制約する」とのべられ、また、より早くは『哲学の貧困』で、「社会的関係は生産力と密接にむすびついている。あらたな生産力を獲得することによ

って、人間は彼らの生産様式を変える。そしてまた生産様式、すなわち彼らの生活手段を獲得する仕方を変えるときに、彼らは彼らのいっさいの社会的関係を変える」とのべられている。

生産力は、はじめはその発展のために役立つ。た生産関係（その法律的表現である所有関係）とやがて矛盾するようになり、生産力発展のさまたげとなる。つまり、生産関係がその内部で発展してきた生産力と矛盾するようになり、やがてそれは変革されざるをえなくなる。こうして、人類は今日までのあいだに、この生産力と生産関係の矛盾によって、いくつもの社会構成体を経験してきた。マルクスが「大づかみにいって、経済的社会構成体のあいつく諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的の生産様式をあげることができるとのべているのはこのことである。

ところが、スターリンの社会構成体の定式はマルクスのそれと少しがっている。スターリンはその論文「弁証法的唯物論と史的唯物論」——この論文はその「ソ連共産党（ボ）小史」の一章として収められた——で、原始共同体的体制↓奴隷制的体制↓封建体制↓資本主義体制↓社会主義体制、という五つの社会構成体の交代を明記している。この規定にはアジアの生産様式は一言もふれられていない。このマルクスとスターリンのちがいをどのように理解すべきであろうか。この問題こそ前号でとりあげた「アジアの生産様式論争」として、戦後にかけて、国際的にも国内的にも論争されてきた重要な論点である。とくに、一九三九年にソ連で発表されたマルクスの遺稿『資本制生産に先行する諸形態』（一八五七—一八八）の日本語訳が一九四七年に出されるにおよんで、この『諸形態』に展開されている所有論、共同体論について、わが国でも数多くの論

## 『資本制生産に先行する諸形態』について

議がおこなわれている。

なおマルクスは、「所有の最初の形態は古代世界においても中世においても種族所有であって、この形態をとらせた条件はローマ人の場合には主として戦争であり、ゲルマン人の場合には牧畜である。古代諸民族の場合には、一つの都市のなかに幾種族かがいっしょに住んでいるので、種族所有は国家所有として現われ、そしてそれになりたいする個人の権利はたんなるポセッシオ (Possessio 占有) というかたちをとる。しかしこのポセッシオは種族所有が一般にそうであるようにただ土地所有にのみかざられる。本来の私的所有は古代人の場合、現代諸民族の場合と同様に動産所有とともに始まる」（『ドイツ・イデオロギ—』、真下信一訳、国民文庫、一六—一七ページ）。とのべ、つづけて種族所有から資本への発展について、次のようにのべている。

「中世から出てくる諸民族の場合、種族所有は封建的土地所有、団体的動産所有、マニユファクチュア資本といった種々の段階を経て現代的な資本、つまり大工業と一般の競争からきまってきた資本にまで発展してゆく。これは公共物とみえる外観をことごとく脱ぎすてて所有の発展にたいする国家のあらゆる干渉を排除したところの純粋な私的所有である。この現代的私的所有に対応するのが現代的国家であって、この国家は税をつうじてしだいに私的所有者たちに買いとられ、国債制度をつうじてすっかり彼らの掌中に落ち、そしてその存在は取引所での国債証券の騰落というかたちで、私的所有者であるブルジョア

『資本制生産に先行する諸形態』について

が国家に与える商業信用のいかにすべてかかることになった。ブルジョアジーは、それが階級であつてもはや身分ではないという理由からしても、いやおうなしに、もはや地域的ではなく全国的な規模で組織されざるをえず、その平均利益になにか普遍的な形態を与えざるをえない。私的所有が公共物〔共同体〕から解放されたことによつて、国家は市民社会とならんでその外にある一つの特別な存在となつたのであるが、しかしそれはブルジョアが対外的にも対内的にもその所有とその利益を相互に保障し合うためにどうしても持つことにならざるをえない組織の形態にすぎぬ（同上二一六—七ページ）。

さて以上で、『ドイツ・イデオロギー』のあげている所有の三つの形態が、実はいずれも種族所有——より厳密には民族共同体所有——を基礎としている所有の三つの形態であることを読みとることができよう。しかし、次に考察するところの、同じように種族所有であり、共同体所有であるところの『資本制生産に先行する諸形態』論での所有の三形態とは、その分析視角が異なっている。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』では「分業の発展段階にふさわしい所有の三形態」であり、『諸形態』では「労働する個人が自分のものとしてのかれの労働の客観的諸条件にたいする関係」という立場から規定された所有の諸形態である。したがつて、『諸形態』では共同体とこれを前提とする共同体的所有が、本源的所有という点で理論的に明確にのべられているのに対して、『ドイツ・イデオロギー』では

この観点がまったく確立されておらず、それ故共同体と社会構成体の観点が混在してのべられていたのである。